

about me

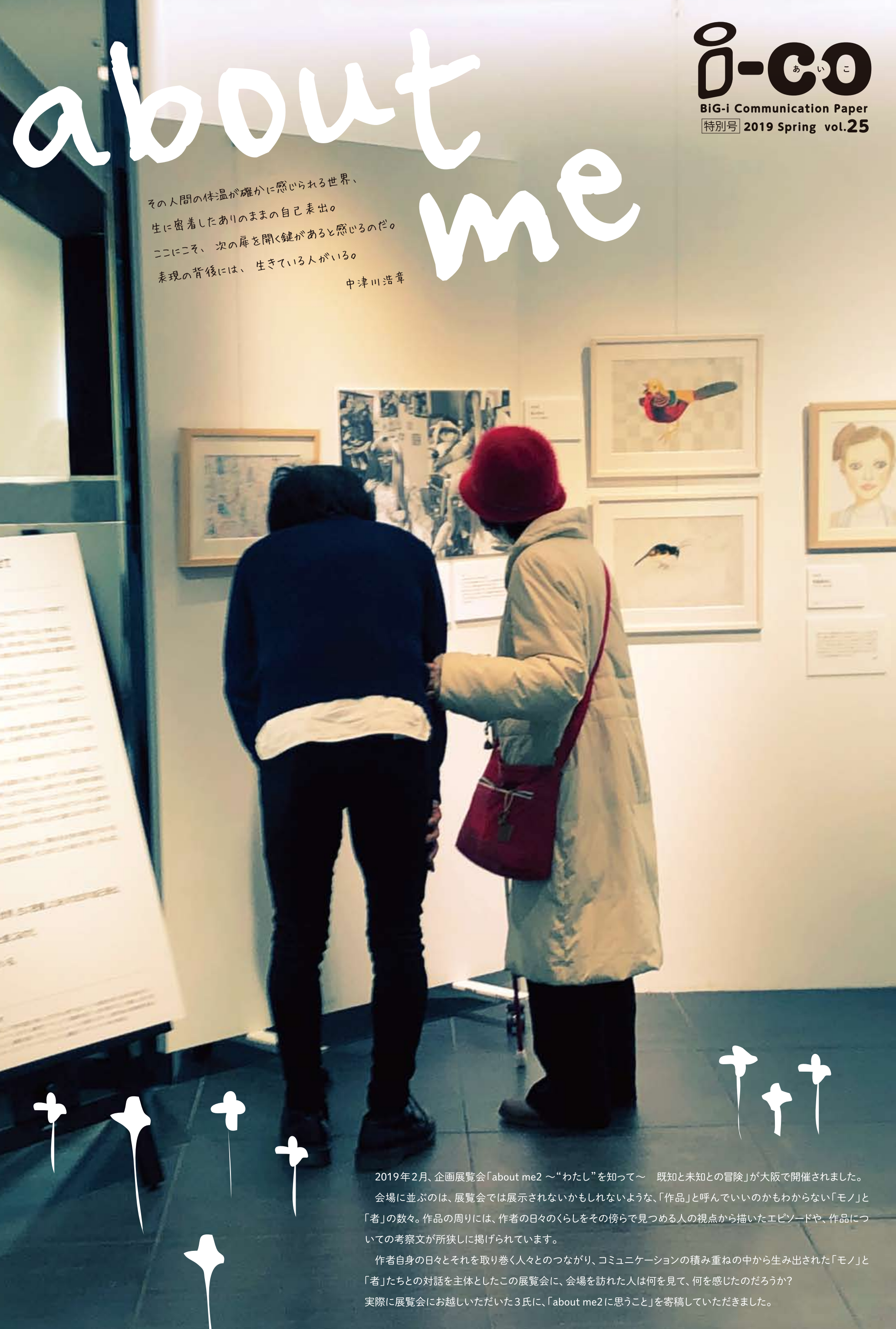
あ い こ

BiG-i Communication Paper

特別号 2019 Spring vol.25

その人間の体温が確かに感じられる世界、
生に密着したありのままの自己表出の
ココにこそ、次の扉を開く鍵があると感じるのだ。
表現の背後には、生きている人がいる。

中津川浩章



2019年2月、企画展覧会「about me2 ～“わたし”を知って～ 既知と未知との冒険」が大阪で開催されました。会場に並ぶのは、展覧会では展示されないかもしれないような、「作品」と呼んでいいのかもわからない「モノ」と「者」の数々。作品の周りには、作者の日々の暮らしをその傍らで見つめる人の視点から描いたエピソードや、作品についての考察文が所狭しに掲げられています。

作者自身の日々とそれを取り巻く人々とのつながり、コミュニケーションの積み重ねの中から生み出された「モノ」と「者」たちとの対話を主体としたこの展覧会に、会場を訪れた人は何を見て、何を感じたのだろうか？実際に展覧会にお越しいただいた3氏に、「about me2に思うこと」を寄稿していただきました。

「about me2～“わたし”を知って～ 既知と未知との冒険」を鑑賞して

藏座 江美

コンクールには入賞しないかもしれない、展覧会では展示されないかもしれない、そんな作品の展覧会が開催されると聞き、とても興味が沸き観てみたいと思いつつ昨年見逃した展覧会の第二弾が、今年も開催されるという。これは観に行かねばと大阪にやってきた。

人通りの多い賑やかな地下街の展示会場は、外の喧騒に負けないくらい賑やかだった…ように感じられたのは、作家だけでなくこの展覧会に関わっている人たちの会話がそこかしこに感じられるような展示方法だったからだと思う。

作家の紹介に加え、くすつと笑えるような、傍にいる人にしか書けないエピソード、作品についての考察を読みながら作品を観ると、会ったこともない作家のみなさんに会ったような、あたかも自分が制作現場にいるかのような気分がさえた。ままと企画者の術中にはまってしまうわけだ。と同時に、苦い記憶が呼び起こされた。

以前、ある施設から「利用者が作っているものを見てほしい、これは作品と呼べるのでしょうか」と相談を受け、その施設に足を運んだことがある。そこには大きな透明のビニール袋いっぱいハサミや手でちぎられて細くなった新聞紙がたくさん詰め込まれていた。障害を持った方たちの作品展を観て、ひょっとしたらこれも作品になるのでは？と思われたようだ。

ご本人や担当のスタッフにはお会いできず、その「もの」だけ見せられても判断に困り、「これはどういったときに作られるのですか?」「いつ頃から?」「その時の様子はどんな感じですか?」などと質問をしても、具体的な回答は得られなかった。それでも、作品展を観て、自分の施設の利用者の作る「もの」も作品と呼べるのかもしれない、と思われたことは、その方にとって大きな変化だと思ったので、そのことが素晴らしいことだと思うと、その利用者さんとの関係性がこの新聞紙の切れ端でいくらかでも変わったのであれば、そのことに価値があると思う、とお伝えしたのだが、期待していたような答えではなかったようで、以降、連絡が来ることはなかった。

連絡をくださった方の最初に観た展覧会が、「about me2」だったらどう感じられたらどうかと頭をよぎった。コンクールに入賞するような、展覧会に展示されるような「もの」としてではなく、その「もの」がその人を知るためのツールであり、その人と周りの人との関係性を豊かに変化させる「もの」として見ることでいい…。すべては私の力不足ではあるのだが、クオリティ重視の展覧会がゴールになってしまっているような最近の状況を考えると、この「about me2」のような手触り感満載の展覧会はとても意味のあるものだと思う。

「about me2」では、日々の営み、スタッフやご家族との関わりが垣間見られて、そこに感動を覚えた身としては、このような機会が至るところで作られることを期待したい。ここからスタートすることができたら、私が犯したような残念な事例は回避され、まさに普及支援という言葉に合致するのではなかろうか。

せっかく時間をかけて実施されているプロジェクトが、発掘→展示のサイクルに捕らわれ過ぎていられるように感じられ、肝心の何のために誰のためにが抜け落ちてしまっただけは、なんだかとてももったいない気がする。そのループに一石を投じている展覧会であることは間違いないだろう。

ここに至るまでの関係者のみなさんのご苦勞を感じつつも、その時間をうらやましいと思いつつ会場を後にした。第三弾が楽しみだ。

藏座 江美(そうぎ・えみ)

2000年より熊本市現代美術館の学芸員・司書。2002年の開館記念展で菊池恵楓園入所者と出会い、以降様々な気づきを与えられる。2015年より一般社団法人ヒューマンライツふくおかの理事として、菊池恵楓園絵画クラブ金陽会の絵画作品の調査、保存活動を始める。2016年からは各地で金陽会の展覧会を企画し、啓発活動を行っている。



「about me2」に寄せて

川井田 祥子

アート活動に取り組む障害福祉施設の存在が知られるようになったのは1990年代頃からである。そもそも「障害のある人に対する見方を変えるきっかけになれば」「自己表現の一つの手段としてアートを活用し、社会参加の機会になれば」などの考えから、先駆者たちは手探りで独自の道を開拓していった。それから20年余りが経過し、障害のある人のアート活動を取り巻く環境はとくにこの数年で大きく変化した。行政による支援事業の増加など喜ばしいこともある半面、急激な変化によって何か大切なものを置き去りにしているのではないかと、先駆者たちがめざしていた方向に向かっているのだろうかという懸念もある。

美術分野に目を転ずれば、各地で多様に展開されるようになった芸術祭などを「アートプロジェクト」と位置づけ、作品評価に関する議論が活発に行われている。熊倉純子氏はアートプロジェクトを、「現代美術を中心に、おもに1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動。作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される」と定義した。さらに特徴として、「制作のプロセスを重視し、積極的に開示」「さまざまな属性の人びとが関わるコラボレーションと、それを誘発するコミュニケーション」などを挙げている*1。アートプロジェクトを実施する地域の住民らが作品制作に関わり、新たなコミュニケーションが生まれるプロセスに価値を見出そうとする動きが広がりつつあるのだ。

こうした美術分野における変化は、何をもち「作品」とするのか、誰がどのように評価するのか、といった問いを投げかけるものであり、既存の美術制度は少しずつ変容していくのかもしれない。冒頭でふれた先駆者たちの中には、障害のある人の創作した作品が既存の美術制度にあてはめられることに大きな意義があると思う人もおり、それ自体を否定するわけではないが、既存の制度にあてはめられない場合が圧倒的に多いのではないだろうか。本展の取り組みは“あてはめられない場合”に焦点を当てるとともに、障害のある人のアート活動への関心が高まっている今だからこそ原点を見つめ直そうという呼びかけにも感じられる。



about me2
～“わたし”を知って～
既知と未知との冒険





「about me / about us」

岡部 太郎



本展で配布されたパンフレットには、作家一人ひとりの表現について「持続性」「必然性」「他者との関係性」「コミュニケーションツール」など7つの評価軸を設け、実行委員が対話を重ねたプロセスも紹介されている。会期中に実施されたトークイベントでは「作品だけでなく、コトを伝えたい」「絵を描くことは本人が主体的になっていくツール」などの発言もあり、芸術的価値だけでなく多面的な価値に気づいてほしいとの願いが伝わってきた。さらに、「美術という概念を拓げていくこと。障害のある人のアートだけが古い美術の制度に囚われる必要はない」との発言があり、本展の取り組みは既存の制度や価値観を変えていこうとするアートプロジェクトではないかとも感じられた。

同様の取り組みを大阪府以外でも実施してみたいとの要望が実行委員会に寄せられているという。本展で何をどう紹介するのかという判断基準を明確にすることは難しいだろうが、この取り組みが全国に広がるとともに、鑑賞者の中に「受け身ではなく価値を共に創り出す側になってみたい」と考えるような人々が現れることを願っている。

※1 熊倉純子監修(2014)『アートプロジェクト：芸術と共創する社会』水曜社

川井田 祥子(かわいだ・さちこ)

鳥取大学地域学部教授。博士(創造都市)。文化経済学会<日本>理事、日本文化政策学会理事。研究テーマはアートによる社会的包摂および地域再生。NPO法人都市文化創造機構の理事・事務局長も務め(2007~2018年)、創造都市・創造農村をめざす自治体やNPOなどのプラットフォームとなる「創造都市ネットワーク日本(CCNJ)」設立にも携わった。著書に『障害者の芸術表現』『創造農村』(共編著)など。

2月の冬の日、底冷えする梅田の地下街は暖かく賑わっていた。

その一角にある展覧会場に入った第一印象は、言葉が多い展覧会だということ。もうひとつは、「about me」と言いながらも、「me / わたし」をこえた表現に出会えたということ。

私は奈良を拠点に活動している一般財団法人たんぼぼの家のスタッフとして、本展と同じ障害者芸術文化活動普及支援事業「障害とアートの相談室」を運営している。私たちは近畿ブロックの広域センターを担い、日々障害のある人の表現の支援の現場に出向くことが多い。この事業でこれまでにたくさんの勉強会や展覧会を開催している。

突然だが、最近の障害のある人の表現活動における「わたし重視」が少し気になっている。

障害のある人の表現に関わっていると、本人はどうかわからないのだが、周囲の人たちが彼ら彼女らの「わたし」にこだわりすぎていることがある。唯一無二の自己表現とか、強烈な個性といった言葉が乱発され、「かけがえのないわたし」というイメージが過剰に感動を誘っている場面に出くわすし、自分もそれに加担しているなあ、と思うこともある。もちろん人は一人ひとりかけがえのない存在だ。しかし、福祉施設などで出会う創造の現場では、完全なる個人の表現というのは、実は少ない。周囲の人たちとの何気ない会話、本人が特に望んでなくてもたまたまやってみた結果のもの、表現がどうかさえわからないことやもの。そこにアートの大きな魅力(や魔力)が潜んでいる。本展の、作品を凌駕するほどの熱量をおびた、周囲の支援者の言葉の数々からももちろんそれが伝わってくる。

自己表現だけではなく、関係性や存在、状態そのものが表現になる。それを見て心を揺さぶられる人がいる。そしてそれを外に伝えていく人がいる。この見えないバトンリレーがアートの醍醐味だと思う。本展を見て思い出したのが、私たちが以前手がけた「特等席から見る風景」という展覧会だ。奈良県内の障害のある人の生活や表現や表現未満について、彼ら彼女らの一番身近にいる福祉施設職員や支援学校の先生たちがキュレーションするという展覧会。目からウロコだったのは、美術の知識や経験だけではなく、関わり合いの濃さと継続性から生まれる独特の感性を伝える力が、実は障害のある人に一番身近な支援者にはあるということだ。about me2を見て、ここにも特等席に座っている人たちがたくさんいる、と嬉しくなった。

つくるひと、反応する人、それを誰かに伝える人が多層に重なって、あちこちで化学変化を起こす社会が豊かな社

会だと思う。特別な場所でなくても、強烈な個性も、誰にも真似できない何かがなくても、表現はすでにそこにある。この小さな表現をキャッチして投げ返す、また思いがけないところから打ち返される。その魅力が本展にも詰まっていると思った。

「me / わたし」というのはこの展覧会で作品を見て目に見えない何かをやりとりした彼ら彼女らとあなたであり、さらにそれを目撃した私たちだ。私はここで、作品といわれるものや、言葉の間にあるものを感じ取ることができた。いわゆる自己表現としてのわたしをこえた表現がこの展覧会の会場に生まれたのだと思う。

最後のつけたしのようなのだが、本展を見て感じたことがある。最近私の心のなかでずっと響いている「選ばれている」という言葉だ。先日、映像人類学者の川瀬慈氏に話を聞く機会があった。エチオピアのゴンドールという都市のストリートに生きる人たちの、フィクションにしか見えない生活を丹念に映像で追った成果を紹介いただくトークを実施した。その際、川瀬さんに調査対象をどう選んでいるのかを聞いた時に、即座に「選んでないんです、選ばれてるんです」という言葉が返ってきた。

わたしは選ばれてここにいる、という感覚。会場のたくさんある作品のなかで、この作品に、この作者に、このエピソードに選ばれている。自分が選んだのではない、選ばれている。その感覚が、この会場にあふれていると思った。この会場にも、そんな選ばれてしまった人たちが、それらの表現に向き合い格闘し、言葉を紡いでいる。この言葉の多い展覧会からは、選ばれた人たち同士の見えない放物線があちこちに見えた。その見えない球は私にも投げられている。

岡部 太郎(おかべ・たろう)

一般財団法人たんぼぼの家 常務理事

1979年群馬県前橋生まれ。高校時代より、地元前橋で地域を巻き込んだアートプロジェクトに参加。現在は奈良を拠点に障害のある人とコミュニティをつなげるプロジェクトや、展覧会、舞台、ワークショップ、セミナーなどの企画運営を担当。また、障害のある人と新しい仕事を提案する「Good Job! プロジェクト」を推進している。



国際障害者交流センター ビッグ・アイ
プロデューサー 鈴木京子



表現活動は、その人自身にとってどんな意味があるのだろうか。

シンプルだけど深い、そんな自分への問いかけから、始まった「about me」という展覧会。

たった2年では、答えは見つからなかったけれど、見えなかった「モノ」や「コト」そして「ヒト」に気づかされ続けている。もっともっと気づきたい、深く知りたいという思いから「about me2」として展覧会を開催したら1,138名という沢山の人の来ていただけた。

私のように何かを探し求めている人がこの展覧会に足を運んでくれるような気がする。

2回目を迎えたこの展覧会の特徴(?)は、障害のある人の表現活動から生まれる「作品」を展示することが目的ではない。作品「モノ」を通じて、ひとりの「ヒト」や日常と時間のなかから生まれるコミュニケーション、他者とのつながり、関係性「コト」を彼らが何を求めて表現しているのか、周縁にいる人、関わる人たちは何を大切にしていかななくてはならないのかを深く掘り下げるための対話が主体となっている。



さまざまな立ち位置から関わる人の対話を「カタチ」にしたものが、「about me」という展覧会になったのだと思う。そう考えると「about me」は表現活動をする作者が「私について」を語っているだけではなく、対話している私たち自身の「about me」でもあるのだと気づいた。

昨夏の8月からスタートして約半年間で5カ所の事業所を巡り、事業所の様子をみたり、利用者の方たちと交流しながら、ゆっくり時間をかけて対話を重ね、それをテキストとしてまとめていく。これは、長い時間と労力、そして半端ない思いが必要だ。いよいよ展覧会が始まると、作者を含め、関わった人たちとの深いつながりと充実感、それに相反して次の答えを探す好奇心が生まれる。2019年3年目を迎える「about me」は、どんな答えを探してスタートするのだろうか?まだまだ、私たちの「問いかけ」は続く。

展覧会概要

企画展覧会

「about me 2 ～“わたし”を知って～ 既知と未知との冒険」

日程：2019年2月8日(金)～12日(火)

会場：ディアモール大阪 多目的空間DiA ROOM(ディアルーム)

入場料：無料

来場者数：1,138名

主催：大阪府

協賛・協力：大阪府遊技業協同組合 大日本住友製薬株式会社

実施主体：国際障害者交流センター ビッグ・アイ

平成30年度障害者芸術文化活動普及支援事業(厚生労働省)

<作者、出展事業所スタッフ兼展覧会実行委員会>

アトリエ ペンライズ

佐々木 智一 竹内 幸恵 津崎 佑輔

スタッフ/松田 博之 松田 豊美

YELLOW

ミルカ 福原 悠太 YOU りくと

スタッフ/日垣 雄一 水野 浩世

社会福祉法人 ハートフル大東

井出 健介 宮本 洋輔

スタッフ/濱口 征弘

社会福祉法人 ライフサポート協会 大領地域の家でいーぶ班

赤石 美紀子 新居 寛之 山本 晃子

スタッフ/安本 幸也 嶋澤 正貴

美術教室ライブハウス・株式会社ライブハウス

高萩 雅理 信谷 優功

スタッフ/大澤 辰男

キュレーター、ファシリテーター/中津川 浩章

オブザーバー/田中 清佳(capacious)

ディレクション/上岡 亜希(ビッグ・アイ)

プロデュース/鈴木 京子(ビッグ・アイ)

<設営・運営>

株式会社リアライズ

国際障害者交流センター ビッグ・アイ

企画展覧会「about me 2」が開催されるまで

キックオフミーティング

2018年8月5日(日)

作品選定ミーティング

2018年11月 9日(金) 「アトリエ ペンライズ」

2018年11月16日(金) 「社会福祉法人 ライフサポート協会 大領地域の家でいーぶ班」

2018年12月 4日(火) 「YELLOW」

セミナー
情報

BiG-i Art's Seminar ビッグ・アイ アーツセミナー 「about me」が伝えたいこと

障害者のアート活動を支える人材を育成するアーツセミナー。

今回は、さまざまな「モノ」や「ヒト」との対話、日常の生活や展覧会「about me」の開催を通して見えてきたものや、

そこで生まれた新たな「問いかけ」をもとに、障害者の表現活動に関わる人に大切な視点や、これからの課題について考えます。

日時：2019年7月14日(日) 14:00～16:00(開場13:30) 会場：アットビジネスセンター PREMIUM大阪駅前 1207号室

登壇者：岡部太郎(一般財団法人たんぼの家 常務理事) / 川井田祥子(鳥取大学地域学部教授) / 藏座江美(一般社団法人ヒューマンライツふくおか 理事)

■定員：30名(要申込/先着順) ■参加費：無料 ■応募締切：7月1日(月) 応募方法については、ビッグ・アイウェブサイトにてご確認ください。

問合せ 「ビッグ・アイセミナー」係 TEL 072-290-0962 FAX 072-290-0972 Eメール seminar@big-i.jp ウェブサイト <https://big-i.jp> [ビッグ・アイ](#) [検索](#)

about me